

研究ノート

英米の引用句辞典：日本語の引用句辞典のために

岡野浩史

Bartlett, John. *Bartlett's Familiar Quotations*, 18th ed. Boston: Little, Brown and Company, 2012.

Knowles, Elizabeth, ed. *The Oxford Dictionary of Quotations*, 8th ed. Oxford: Oxford University Press, 2014.

Ratcliffe, Susan, ed. *Concise Oxford Dictionary of Quotations*, 6th ed. Oxford: Oxford University Press, 2011.

Ratcliffe, Susan, ed. *Oxford Dictionary of Quotations by Subject*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 2010.

Ratcliffe, Susan, ed. *Little Oxford Dictionary of Quotations* 5th ed. Oxford: Oxford University Press, 2012.

Partridge, Eric. *A First Book of Quotations* 2nd ed. London: Hamish Hamilton, 1960

アメリカで引用句辞典と言えば John Bartlett (1820–1905) の作った *Bartlett's Familiar Quotations* (以後『バートレット』) ということになっている。現在出ている一番新しいのが第18版で2012年の出版だが、最初の版は1855年であり、160年の歴史がある。New England の35歳の本屋 John Bartlett が出した辞典は発売されると「洗練された女性や進取の気性に富む若者に広く利用され、まもなく、聖書と並ぶ、一家になくなくてはならない古典となった」とは1965年に辞典初版のファ

クシミリ版を出した Philosophical Library Inc. 社の宣伝文句である。1980年に
出た出版125周年記念の第15版には、改訂者 Emily Morison Beck による
‘Historical Note’ と題された文があり、15版に至るまでの経緯が記されている。
以下の多くはその文による。

最初の『パートレット』には258ページに169の諸家からのことばが載せられて
いた。聖書とシェイクスピアで全体の三分の一を占め、残りのかなりの部分はイ
ギリスの大詩人である John Milton, Alexander Pope, William Wordsworth,
George Gordon Byron 等の詩句であり、散文からは極めて少なかった。アメリ
カからは名のあった詩人の一部が取り上げられているが極めて微々たるもので、
アメリカ独立の父祖 George Washington や John Adams, Thomas Jefferson 等
からは一行も取られていない。Benjamin Franklin は載ってはいるが、その量
は半頁にも満たない。選ばれた引用句はイギリスに、そして詩句に大きく偏重し
ている。パートレットの選択基準は「慣れ親しんでいる度合い (familiarity)」と
「価値 (worth)」であった。第4版を出したときのパートレット自身のことばによ
れば、選出にあたっての方針は ‘not be admitted “simply on their own merits,
without assurance that the general reader would readily recognize them as old
friends”’ である。つまり、そのことばの価値だけではなく、読者がその句を旧友
のごとく ‘familiar’ であると感じるか否かということが基準である。この辞典の
タイトルが ‘familiar quotations’ となっている所以である。それにしてもイギリ
スの詩句の量が圧倒的多数を占めており、当時のアメリカの文化的立ち位置を彷彿
とさせる。(英国首相でありノーベル文学賞受賞者でもあった Winston
Churchill (1875-1965) が「教育のない者は『パートレット』を読むとよい」
ということばを残しており、自分自身が幼少期に『パートレット』で勉強したこ
とを告白している。このことばは『パートレット』を初め、多くの引用句辞典に
収録されている。パートレットの引用句の選択眼は19世紀末のイギリスでも高く
評価されていたと思われる。)

第9版(1891)までは、パートレット自身が改訂を重ねている。そのあと改訂
を続けていく人物が第10版も第11版も詩人であることは興味深い。パートレット
自身が詩に強い嗜好があり、それが辞典の成功につながったことはまちがいない
が、辞典の編集の継承者が詩人であったことが、いっそうの発展につながったよ

うに思われる。パートレット死後の最初の改訂である第10版では大きな編集方針の変更があった。編者の Nathan Haskell Dole は、それまで掲載の重要な基準であった「慣れ親しんでいる度合い 'familiarity'」の他に、「明確な永続的価値 (distinctly worthy of perpetuation)」という観点からも引用句を選ぶこととしたのである。これにより、この辞典は初版の「大きさにおいては2倍、厚さにおいては3倍」という堂々たるものになった。そして第10版は1914年から1937年までの長きに渡って使われることになる。

第11版を引き継いだ詩人の Christopher Morley は自他ともに認める英語好きだったが、彼は共同編集者として、『ニューヨークタイムズ』に関係し、アンソロジーの編集者でもあった Louella D. Everett を選んだ。その結果、「片方は長年の経験から読者が欲している引用句に勤が働き、もう片方は読者がどのような引用句を嗜好するべきかに独自の嗅覚を持った編集者コンビ」が誕生することとなった。ここで『パートレット』はさらに大きく生まれ変わることとなる。古くなったもの、すでになじみの薄くなったものをぱさぱさ削り、代わりに、初めて古代から時代を下りながら、二人の編集者の勤に基づいてことばを選んで入れていった。前の10版を出した1914年からこの第11版の1937年までのあいだには多くの文学者が登場した。また、この時代になって急激に評価が高まった文学者も多かった。その結果、新版においては Herman Melville, Nathaniel Hawthorne, Emily Dickinson, Henry James, T. S. Eliot 等々のアメリカの文学者からの引用が大幅に増加した。その結果、古代から年代順に新たに選ばれた引用句と合わせて、この第11版はそれまでのものとはまったく面目を一新することとなる。そして、そのあとの『パートレット』の改訂はこの第11版の微調整を続けていると聞いていい。

125周年記念の第15版(1980)の改訂者であるベック女史によれば、改訂版が出された直前の10年は ecology の10年であり、改訂にあたっては ecology に関わる多くのことばを取ったという。また、文化の地平の拡大を受けて、コーランや仏教に関するものも大幅に見直して強化した。さらには黒人霊歌、先住民の歌や詩なども初めて入れている。改訂内容の説明の最後のところで女史は第11版の編者であったモーレイのことば——『パートレット』は「一種の文化人類学、社会史、民族の日記」である——を引用し、自分も同様の考えであるとしている。

『パートレット』の最新版である第18版は2012年10月に出ている。編者のGeoffrey O'Brienは簡単な序文を付して創始者ジョン・パートレットの偉業をたたえ、最初に彼が選んだことばは聖書、シェイクスピア、イギリスの詩人などに大きく偏っていたが、その選択の中に示された嗜好 (taste) は後に続く編集者たちの確固たる、揺るぎのない拠り所となつて、広範にわたる改訂と追加とを可能とした旨を記している。つまり『パートレット』がアメリカ人の160年の支持を受けたのは創始者ジョン・パートレットの 'taste' ゆえということになる。そして18回の改訂を重ねた現在の『パートレット』は 'American taste' の見本市と言ってよい。最新版には、大統領 Barack Obama からは "Yes, we can!" ということばも含めて12、アップル社の創業者 Steve Jobs からは4つが取られている。文学の世界からの追加は少なく、文学以外の分野からの選出が目立つ。この傾向は今後も続くことはまちがいない。『パートレット』はアメリカ文化の鏡となつて、これからも読まれ続けるだろう。

引用句辞典のもう一方の雄がイギリスの *The Oxford Dictionary of Quotations* (以後『オックスフォード』)である。オックスフォード大学の出版局から第8版が2014年に出ている。この辞典の初版は1941年で、『パートレット』に比べるとかなり新しいが、それでも70年の歴史があり、現在、イギリス随一の引用句辞典と言ってよい。この辞典については、1993年からオックスフォード大学出版局で辞書編集に関わり、『オックスフォード』第7版、第8版の編集担当者である Elizabeth Knowles が、第7版 (2009年) を担当したときに辞典の出版・改訂の経緯を纏めている。

ノールズ女史によると最初にこの辞典を出す話が出たときには、*New English Dictionary* (NED、現在の *Oxford English Dictionary*) を利用して、イギリス詩の引用句辞典を作るはずだったという。1915年のことである。収録語数40万、用例180万、引用者数5千で全10巻を超える、歴史原則により編集された辞書 NED を使えば、比較的容易にできると考えられたようだ。しかし、その計画は実行されず、1931年に出された新たな企画案では、「需要を考慮して」、より広い範囲の内容の辞典とし「特に、外国語からのもの、および現代のもので、よく見聞きはするが、まだ本に収録されていないようなことば (quotation) に重点

を置くこと」とされていた。最終的に編者たちが取ることにした方針は「主要な著作家のものも含め、文学作品を主にし、教育も教養もある人物によって英語で引用される可能性の高いことばを収めた引用句辞典にする」ことであった。

10年後、Charles Darwin (1809—1882) の孫である Bernard Darwin (1876—1961) の序文が付けられて最初の『オックスフォード』が出る。(序文の書き手がなかなか見つからず、引用句の愛好家として知られていたダーウィンは、序文を6時間以内に書きあげれば15ギニーを払うという条件を出され、そのとおりにしたという逸話が紹介されている。) 初版に掲載された引用句の出典はシェイクスピアを初めとするイギリスの古典となっている諸作家、英国国教会祈禱書、聖書、伝承民話 (ballads)、伝承童謡 (nursery rhymes)、『パンチ』(ユーモア雑誌) 等々である。そしてラテン語、ギリシャ語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の引用句は原語と英訳との両方が掲載された。内容は圧倒的に英国中心である。また、同時代の作家は最小限の引用に止められている。1941年10月に出た初版は印刷した2万部が1か月で売り切れた。しかし、戦争中だったので増刷のための紙の確保に苦しんだという。

第1版の売れ行きに力を得て、1949年に改訂のための委員会が作られた。この委員会では何を収録すべきかについて活発な議論が行われたが、中でも明快な結論が出なかったのが、何が ‘quotation’ かということだった。これについては今でも結論が出ていないというのが、ノールズ女史の意見である。(これは日本語の訳語の場合も同じである。‘Dictionary of Quotations’ をとりあえずは「引用句辞典」と訳しているが、辞典の内容と照らし合わせたときに落ち着きの悪い場合が多々ある。日本で編纂された、英語圏ならば「引用句辞典」にあたる辞典が「名句辞典」というようなものに名を変えて流布されているのも理由のないことではない。) 第2版は1953年に出た。一番大きな特徴は著者のアルファベット順としたことである。聖書は *The Bible* だから B のところに入る。そして各ページにある引用には番号が付けられた。これでいくつかの箇所を参照しあうこと、つまりクロスレファレンス (cross reference) が容易になった。これは以後踏襲され、現在に至っている。引用句そのものの収録については、古いものを削り、新しいものをできるかぎり広く採録していった結果、たとえば、Winston Churchill のことばは多く入ることになった。

1979年の『オックスフォード』第3版では大なたが振るわれ、まず伝承童謡が削除された。大家による伝承童謡辞典の決定版がオックスフォード大学出版局から出たからだ。また、歌から取られていたものも落とされた。メロディーを伴って思い出されるようなものは引用句 (quotation) としてふさわしくないという理由である。広告文、スローガン、キャッチフレーズなど、さらにはラジオ、テレビなどのメディアから出たものも極力回避するということになった。そして改訂にあたったチームの方針は、「この引用句辞典は人口に膾炙した引用句の辞典であるべきで、個人の好みによる名句集であってはならず、大学出版局の最初の特定の集団の特定の好みを反映したアンソロジーであってもならない」ということだった。結果、できあがったものは、時代の反映としての引用句集ではなく、西洋の文学的伝統の中心にあるもの (今のことばで言う 'western canon') を映し出す引用句辞典となった。

第3版から13年後の1992年に出た第4版では、また方針が変わる。現代にも再び焦点が当てられ、歌の文句が復活する。非英語圏の作家や思想家、著名人からも多くが取られ、さらに女性、科学者からのものも増加し、内容が一挙に多様化した。それはイギリス社会の多様化に対応したものだ。初版の出た1941年にはそれなりの教育を受け、共通の教養をそなえた読者を想定して辞典を作ることが可能だったが、90年代ともなれば、もはや、そういう時代は終わりを告げ、多種多様なバックグラウンドの読者が相手となっていた。そして7年後の第5版 (1999年) ではキリスト教以外の他の宗教の聖典からのことばも辞典に掲載したのである。(この点では、『ポートレット』は前述のように1980年代にはすでにコーランや仏教からの引用句を多く取り入れており、『オックスフォード』に一步先んじている。アメリカ文化の開放性を感じさせる。) 第5版のもう一つの特色はコンピューターを駆使しての編集である。特にクロスレファレンスの充実にコンピューターの力は大きかった。また、読者の声が大きく反映されることになり、諺、伝承童謡等が復活を遂げた。2004年の第6版以降は第5版の方針をさらに進めたものと言ってよい。第7版、第8版では、英語の巨大データベースである The Oxford English Corpus を活用し、引用句の使われている度合いを検証しながら、読者のニーズに応えようとしている。ブログや各種のウェブサイトが使われているかどうか調査の対象としている。また、第8版からは引用句に

がついていけば、オックスフォード大学出版局の運営しているウェブサイトに行くと、その引用句を音でも聞くことができる。つまり、チャーチルのことばをチャーチルの演説で聞けるのである。詩人が録音を残している場合も聞ける。古代英語の詩なら原語を聞くこともできる。

『オックスフォード』はすでに第7版からオンライン上でも利用できるようになっており、この辞典は伝統的な紙媒体の中でも新しい試みをしているのみならず、ネット上でも新たな可能性を探っている。

Concise Oxford Dictionary of Quotations (以後『コンサイス』)は、『オックスフォード』をもとにした引用句辞典である。1993年に初版が出て、2011年に Susan Ratcliffe の編集による第6版が出ている。これは初版から現行版まで常に、母体となっている辞典の引用句を絞り込んでより小さい器に盛ると言う形で編集が行われてきた。辞典名に 'concise' と冠されている所以である。第6版では『オックスフォード』の20000の引用句を9000にまで絞り込むにあたって編集者が一番活用したのが、前述の *The Oxford English Corpus* である。この巨大データベースの中でそれぞれの引用句が使われている頻度をもとに、選択を行った。基準はあくまでも「多く使われているか」である。この『コンサイス』自体には新しさはなく『オックスフォード』の簡約版に過ぎないといってもいいだろうが、この簡約版と並んで *Oxford Paper Reference* のシリーズに入っている *Oxford Dictionary of Quotations by Subject* は『コンサイス』とはまったく違う構成の引用句辞典である。

Oxford Dictionary of Quotations by Subject (以後『主題別』)は、初版が出たのが『コンサイス』に遅れること7年、2000年に *The Oxford Dictionary of Thematic Quotations* という名前で初版が出ており、名称が変わった最新版の第2版は2010年に出ている。編者はいずれも『コンサイス』の編者であるラトクリフ女史で、彼女は『オックスフォード』の編者ノールズ女史と組んで10数年来引用句辞典の仕事に関わっている。『主題別』は『パートレット』や『オックスフォード』などの従来引用句辞典とは一線を画するものである。従来のは引用句はすべて原著者(書)の元に集められており、その原著者(書)が時代順で出てくる(『パートレット』)か、アルファベット順で出てくる(『オックスフォー

ド])かのどちらかである。引用されていることばは、そのことばの意味する内容とはまったく無関係に配置されている。しかし、『主題別』では、その名の通り、ある主題のもとに引用句が一同に集められている。例えば、「時間」という主題に行くと、そこには30の「時間」に関する引用句が置かれている。古代インドのバガヴァッドギータから現代に至るまで、「時間」に関する引用句が掲載されている。マツオバショーの名があり、「月日は百代の過客にして…」という『奥の細道』の冒頭が引かれている。シェイクスピアからは‘To-morrow, and to-morrow, and to-morrow’で始まる、夫人の狂死の報を聞いたときのマクベスの独白が取られている。「結婚」という主題にも同じように古今東西の引用句35が置かれている。それぞれの引用句を読んでいくと「時間」や「結婚」について想像力を刺激されることしきりである。『主題別』のメリットは明らかである。ふつうの引用句辞典が「それを言ったのは誰か」を中心に構成しているのに対し、『主題別』は「あることについて人間はどんなことを言ってきたのか」を、古代から現代まで世界規模でパノラマのごとく見せることができるのだ。しかし、主題別に引用句を配置するにはまず主題を立てないといけない。どのような主題をどれだけ立てればいいのか——これだけでも選択は容易ではない。そして主題を立てたら、そこにどのような引用句を入れるかという同じように困難な問題が出てくる。コンピューターでキーワードを手掛かりに分類させるだけではだめである。それでは、たとえばサミュエル・ジョンソンが、ひどい結婚が終わったあと、まもなく再婚した男のことを聞いたときに言ったとされる「希望が経験に勝ったのだ」ということばはもれてしまう。コンピューターによる機械的な分類作業などより、もっと知的な、もっと人間的なものが入らなければ、生きた辞典になろうはずがない。当然、主題別の辞典を作ろうとすれば、従来の引用句辞典とは比較にならない、人間的な労力が必要となる。そして、従来の引用句辞典とは異なる力学が作用するようである。というのもオックスフォード大学出版局は1997年に *The Oxford Dictionary of Phrase, Saying, and Quotation* という辞典を出しており、これが主題別の構成で約10000の引用句が450の主題のもとに集められている。編者は『オックスフォード』のノールズ女史である。ところが、これはなぜかすぐに姿を消してしまっているのだ。理由はわからない。そのあと同女史は『オックスフォード』の第5版(1999年)で、43の主題を選んで、そこにいくつ

かの選択された引用句を参照できるようにするというをやっている。しかしわずか9ページを割いただけで、これはいかにも中途半端な試みだった。この第5版きりで姿を消している。そして、そのあとの2000年にノールズ女史ではない、ラトクリフ女史の編集による、7000の引用句から成る『主題別』が出ている。

じつは、ラトクリフ女史はオックスフォードから、主題別の引用句辞典をすでに1994年に出している。*Little Oxford Dictionary of Quotations* (以後『リトル』)である。現在の第5版は2012年に出ている。少し厚手の文庫本2冊ほどの大きさで、装丁が美しい。『リトル』は4000の引用句を Ability から Youth までの300超の主題に分けて掲載している。5版まできていることに、その支持の程度がわかる。なぜ、引用句数4000の辞典が引用句数10000の辞典より支持を得ているのか、いろいろな説明ができるかもしれないが、主題別の辞典は先述のような事情もあり、一筋縄ではいかないということだけははっきりしているように思われる。20000の引用句から成る『オックスフォード』と同規模の主題別辞典が出るにはもう少し時間がかかるかもしれない。

最後に触れておきたい引用句辞典が *A First Book of Quotations* (以後『ファースト』)である。ロンドンの Hamish Hamilton 社から、1958年に初版、1960年に第2版が出ている。この辞典を作ったのは Eric Partridge、イギリスの代表的な辞書編纂家である。彼は今でもスタンダードとなっている英語のスラング辞典の編者であり、シェイクスピアの語彙辞典も編んでいるが、熱心な教育者でもあった。彼には *English: A Course for Human Beings* (『英語—人間への道』) という名著がある。人間愛にあふれる英語の専門家が書いた500ページを超える英語の教科書である。小学生から大学生まで使える。そのパートリッジが青少年のために編んだのが『ファースト』である。彼は序文の中で、この引用句辞典は「すべての若者に適切であり、かつ、大学入学時に知っていることを期待されているような引用句を集めたもの」と書いている。選ばれている1058の引用句のうちシェイクスピアからは153、聖書からは104、Alexander Pope からは29、Samuel Johnson からは22、John Milton からは21と圧倒的に英国中心だが、古代ローマのホラティウスやキケロからもそれぞれ20近くが取られている。パートリッジは、引用句の選択がまったく自分の個人的な好みによっていることを明言しているが、

これは、イギリスの知識人の典型でもある人物の選んだ引用句集である。だから、『ファースト』はイギリスの青少年の教養に資するだけでなく、日本人の私たちにとってはイギリスの教養のミニマムエッセンスを窺い知ることができる読み物となっている。日本で明倫出版というところが1986年にこの辞典の復刻版を出したのは故なきことではない。なお、パートリッジが『ファースト』を「主題別」で構成していることは重要な点である。

英米にはここで取り上げた引用句辞典の他に、百花繚乱、じつに様々な引用句辞典が出ている。翻って、日本ではどうか。日本では引用句辞典が少なすぎると嘆いて、詩人の加島祥造氏が英米の引用句辞典に関する好著『新・英語の辞書の話——引用句辞典のこと』を物したのは1983年のことだった（同著は1990年に『引用句辞典の話』となって講談社学術文庫に入った）。その後、同じような嘆きを早くから公にしていた外山滋比古氏は斯界の専門家と組んで『英語名句辞典』を1984年に、『日本名句辞典』を1988年にいずれも大修館から出した。また、加島氏自身も上述のパートリッジの引用句辞典を抄訳・解説した『英語の中の常識——パートリッジ引用句辞典から』を上下に分けて、大修館から1986年、87年に上梓している。しかし、それから30年ほどがたった現在でも、日本語の引用句辞典の状況はあまり変わっていないように思われる。なぜ、日本では引用句辞典がはやらないのか——これは極めて興味深い問題だが、この問いに対して私は今明快な答えは持ち合わせていない。ただ、詩歌に限ってなら、日本では1000年も前に『和漢朗詠集』という先駆があり、現代においても、おびただしい数の名句集、名歌集があり、また、辞典という形にこそなっていないが、大岡信氏の『折々のうた』のような傑出した仕事もある。これらを考えれば、日本でも、より包括的な、江湖の支持を得られるような引用句辞典が歓迎される可能性は十分にあるように思われる。『パートレット』や『オックスフォード』の中に展開されている、広くて豊かな世界を思うにつけ、日本の『パートレット』、日本の『オックスフォード』が誕生することを願わずにはいられない。